
アンタ = 相棒Yo

ギン狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンタと相棒Y.O

【Nコード】

N0125B

【作者名】

ギン狐

【あらすじ】

少女、砂絵^{サエ}の頭の中で聞こえる声。彼女と声の少女とのコメディ
ー+切ない？ストーリー…。

1：声（前書き）

コメディーじゃないかもしれませんが、読んでくださると幸いです。
笑

1：声

白い天井。

白い壁。

白いベッド。

私はその、ベッドに横になってたらしい。

だって、目の前には…ママの顔があつたもの。

私の頬には、大粒の涙が落ちてきた…マ

マの涙。

ママは私の顔を覗き込み、目を大きくした。

「…マ…マ…？」

途切れ声で母を呼ぶ。

「先生っ！！砂絵が…砂絵が…」

ママは泣きながら、私の手を力強く握ってきた。

私…どうしたの？

何故、此処に？

家に帰るために、いつもの道を歩いていて。

友人と別れて。

たばこ屋さんのおばさんと話をして、角を曲がって…それから…
それから…。どうしちゃったんだろう。

『…事故にあつたんだ』

頭の奥から響いてくる声。低く、少し高めの口調。

深く頭に焼き尽く…。

………What this is?

何この声は!?

事故?私が!?

頭の中で口づさんでも、声は返ってこなかった。

…そ、そういえば…そんな気もしないではないけど。

「マ…マ。私、どうしたの?此処は?」

母は私が話を始終わると、ハ、という表情をした。

そして、母は血相を変え、近くにいた意志の肩を揺さぶりながら

「先生、砂絵が…キ、キ、キオクソウシツに…!!」

私は何のことやらサッパリ意味がわからなかった。

医師も私と同じように啞然とし、一息ついて言った。

「お、お母さん…おち、落ち着いてください」

いや、アンタが落ち着けよ、と思ったが口には出さなかった…。

何故かって?

それはね、私が仮にも医師に向かってそんな事 言ったら…ママの
チョップで本当に記憶喪失になりかねないからさ。

医師は軽く、咳払いをすると話しに戻った。

「記憶喪失とはですね…記憶を忘れてしまうという事で、娘さんは
お母様の名前等をお忘れになってない。と、いうことは記憶はある、
と断言しても良さそうです。ですから、彼女…娘さんは………」

「先…生?」

「………記憶喪失ではない、です。それと、明日には学校も行け
ますよ」

「は、はア…」

と長い長い話が終わり、私も再び、寝ることにした。

2：再び

何やら知らない間に、四日も過ぎていた…。入院中、三日目まで爆睡状態だったらしい。

そして…久々の我が家から学校に行くことにした。

変わらぬ我が家。

気遣ってくれる妹。

変わらぬ私。

何もかも普通のはずだった…。

「さて、学校に行くかな」

私は鞆を持ち、鏡でもう一度チェックした。

「よしっ！！」

『何がよし、なのよ。左のピンズれてる』

「え？あ、本当だ。ありがと——！？」

あれ？

今のは誰の声？

鏡に映ってるは…私。

どう考えても、私以外いない。

じゃあ………一体。

『礼くらい最後まで言いなさいよ』

「い、いやああああ！！また出たわね」

私は家中に、響くくらいの大きな悲鳴を上げた。

「砂絵、どうしたの!？」

「な、何でもないわ」

「何も無いわけないでしょ？」

「そうだけど……」

「わかった。ゴキブリが出たのね？退治しといてあげるから……ほら、学校行きなさい」

「う、うん」

何か良くわからないけど……一体、何なの？あの声。
気味が悪いわ。

『ふっ、気味が悪くて結構よ』

「きや!!ま、また急に声出さないでよ」

『人の勝手でしょ!!』

「私の頭が痛くなるじゃない」

『それはそれ。これはこれ』

「どうしたら、そうまとめられるのよ……。とにかく、学校では私に話かけないで!!」

そう、この声の主の姿はない。

私の頭の中で、聞こえてくるだけ。

もちろん、私が可笑しいわけじゃないわ。

あの時の事故から……聞こえるようになった。

今だに、存在を忘れてしまう……。

トラブル

ギャアギャア騒いでるうちに学校へと着いた。
教室の方も、何やら騒がしかった。

「おっはよー!!」

「あ、砂絵!! 久しぶりー大丈夫なの？」
友人の一人が私に飛び付いてきた。

「うっが!! …っ大丈夫…のはずだけど、君のせいでヤバいかも」
私が苦し紛れで発したのに、気が付いた友人は、直ぐさま抱きつくのをやめた。

「ありゃ? …ごめん!! つい…癖で」

「そんな癖持ってたっけ？」

「…つい…嬉しくて？」

いや、完全に間が開いてるし。それに、私は聞こえていた…彼女の
呟き声が。

あ、間違えた。と…。

ガラガラー

教室の扉が勢い良く開く。

「起立!! ……礼、着席」

その声に合わせて、クラス全体がまとまった。

と、思ったのも束の間、先生が教室から出ると一気に騒がしくな
った。

「はい、この問を川島さん…やってみてください」

言うのを忘れていました。私の名前は砂絵。

フルネームでは川島 砂絵なのです。

って、ええ!?

私ですか!!

黒板には方程式が書かれていた。

「えっと…その…」

シドロモドロでいると、また頭の中で声がした。

『答えは…3だ』

「どう考えても3にはならないから。それより、黙ってなさいよー

『大丈夫だ、あつてる。安心して答えなさい』

その自信はどこから来ているのだろっ、と思うほどに力んだ口調だった。

そんな彼女を無視し、私は黒板を睨み付けた。

「えっと…6を移項して……」

『だから3だって。早く言っちゃいなさい』

「いいから、黙っててよ」『早く言わないなら…ワタシがアンタになって言うわよ?』

「それ、、、どういうことよ!?!」

『だから…乗り移っちゃわよ…ってこと』

私の脳内では、彼女が不気味な笑みを浮かべる姿が過った。

『さ、早くいうのよ』

「うるさい……」

故

『さ、早く言うのよ』

「うるさい……」

「か、川島さん？わからないなら良いのよ……？」

『さ、早く言え。言うのよ！！さもなくば、ソナタに憑依するぞ……よ？』

先生の声と彼女の声が二重になって、聞こえてくる。

「う……うるさいっ！！」

クラス中の視線が私へと。

あれ？

それは私にとって、一つの答えを意味していた。

もしかしての……もしかして……？

私やっちゃったの！？

「か、川島さん！？先生に何っていう………」

あゝ的中……！

もしかして、が当たっちゃた……。

『ぷっ………（笑）』

「……っ」

とうとう、雷が落ちるかと思い、身を縮めた。

「せ、先生えは……か、川島ちゃんが……そんなこという子だとは……おも、思わなかった……わ……」

先生は手にハンカチを持ちながら、溢れるばかりの涙を拭った。

泣いちゃった。。。

泣くところだったの？

いや、只、単に涙腺が弱いただけだったの…かも。

そんなことを考えていると先生はドアを開け、早足でどこへ去ってしまっただ。

どこか、って言うっても職員室かトイレしかないと思うけど…。

「あ……ど、どうしょ」

『何でさっきの人泣いてたの？』

「やばい。絶対、職員室で広まってるわ……そしたら…ママにも！」

たぶん、私の顔は青ざめていく一方だっただろう。
いや、きっとそうだ。

『ねえ！！聞いてる？』

「…何！？」

『だから、何であの人泣いてるのよ！！』

私は等々、自分をコントロールできなくなり、姿もない声に怒りをぶちまけた。

「アンタのせいよ…」

『えっ？何でそうなるのよ！？』

「…黙っててって言ったわよね？私…」

『そ、そうだけど…。あの方程式、すごい簡単だったんだもの』
「……なわけないでしょ」

5：名（前書き）

評価をしてもらえると嬉しいです。

感想であーし

の方が良いところはダメだとかも参考になるので、もし良かったら
お願いします

5：名

「何が…簡単だもん、よ。アレで答えていたら大恥よ!!」

『なんでよ?』

「間違ってるからに決まってるでしょ!?!どう、考えても3にはならないの!!わかった!?!これ以上、喋れないでよね」

『!!!?!?』

それからと言うものの、学校内では一度も頭の中で声がしなかった。

「ねえ、もう喋ってもいいのよ?」

帰宅途中に声を掛けてみたが、返答もない。

「ねえ、ちよつと聞いているの!?!」

『ああ、もう、うるさい!!!』

「うぎやつ!?!」

砂絵の頭の中では、うるさい、という5文字が小玉していた。

「い、いきなり声張り上げないでよ!!」

『何よ…』

「ていうか、アンタよく黙っていられたわね」

『黙ってたってゆうか…あの方程式を解いてたら…寝てしまっへへ、と悪戯っぽく笑ったような声のテンポ。』

『あ、そういえばアンタ砂絵っていうのね』

「そうだけど?」

『私と少し似てるわねえ。あ、自己紹介がまだだったわね。私、サ
三』

「サ…ヨって砂に?」

『夜って書くの』

「そう、なんかアンタの存在自体が魔女みたい…名前もね」

『な、何よ！！文句あるの！？たった一文字違っただけで…』
「あゝひつどい」

『先に言いだしたのはそっちでしょ？サ・エ』

二人して騒ぎながら、家に帰った。

これまた傍から見れば、変な光景だ。

何とも奥床しい。

そんな…私達。

6：忘れ物

あれから…サヨの声が聞こえるようになってから…どれくらい経ったんだろう。

両親よりも――

先生よりも――

友達よりも――

サヨと一緒に時間のほうが多くなった。

まあ、私の頭の中にいるんだものね。

そして、それが原因か、はたまた全く違うことのせいか、とにかく私の中でサヨの存在がでかくなった。

「サヨ、今日も静かにしててね」

『はい、はあゝい』

「ママいつてくるねえ」

玄関でいつものように声をあげた。

『あ、ちよ、ちよつと待った！！ア、アレ忘れてるわよ』

「…アレって？」

『アレよ！…アレ！…えっと、ご飯…？』

「あ、ああ！！お弁当ね。でも、なんで疑問文…」

サヤは一旦、靴を脱ぎリビングまで走った。
弁当を片手にし、また靴をはく。

「次こそ、いつてきまあゝす」

『…………』

「まだまだ、余裕ね」

『…………』

家から何メートルはなれたところなのか、サヨは急に黙り続けた。学校に多少、近いせいもあるかもしれないが…。

…………何かがおかしい…………

「サヨ？」

『なあ…………』

「な、なに？」

『今日は確か、体育とかあうのがあったような』

「え、うそ！？」

『…なかったような』

「どっちよ！？」

『あ、あった！！…たぶん』

「…はあゝ」

回れ右をし、家へと猛ダッシュで向かう。

「な、んで、もっと早く言ってくれなかったの？」

『そうね、強いて言うならば…今まで考えてたの』

「あの、ね、ちよつとでも、可能性があるなら…早く言つて…」

途切れ途切れに、喋っているが、これこそ体力の消費の原因だ。

ハーマニー

学校につき、いち早く向かうは…自我の席。

カバンを横に引つ掛けると同時に、机へと覆いかぶさった。

「つかれたあゝこんなんで体育なんて…」

「サエ早くー!!」

ドアの前で手招きをしている友人。

「どうしたの??」

「どうしたのって、次は…」

「『体育』」

「…え!?!」

周りを見渡せば、女子は誰一人いない。

私以外は…。

男子はそんな私、お構いなしで堂々と着替えていた。

「え、うそっ!?!」

「『はあゝ何やってんのよ』」

友人の声とサヨの声がハモっていた。

なんてゆうか、アルトとソプラノでが合唱をする感じだった。

「うわっ…」

私は自分の発想の凄さに、声を洩らしてしまった。

「『何、どうしたの?』」

また…良い具合に合っていた。

まさか…この2人、相性良いんぢや……………

うん、どこことなく不陰気も似てるしなあ…そうなのかも。

そんなこと、考えながら着替えて、体育館まで足を運ぶ。

「サ、サエー!!見て、見てっ!!」

「え？」

「いや〜ん！！北上先輩だあ…ラッキ〜今日一日ハッピーになりそー」

「うん、君のそのテイションの高さならなれるよ。ラッキーにもアンラッキーにも…」

「それより私は……」

うふ。

あ…岸野先輩！！

なんて、素敵なんだろう。先輩だけは、輝いていた。

『それはサエだけよ。私もどちらかといえば…』

サヨは、私の考えていた事を盗み聞きして言った。

そして、チラリと北上先輩の方を…見ていた。

「はっは〜ん（笑）アンタ、北上先輩みたいなのが好みなのね？」

『サエより趣味は良い方ね…』

「な、岸野先輩をバカにしないでよっ！！」

『別に。サエを馬鹿にただけよ…』

「ムカツク〜」

込み上げてくる、怒りを拳へと集める。

今だったらドラゴン・ールにも勝てる気が…。

「ねえ、サエ〜あんたこの頃、変よ？」

「な、何が!？」

「いや、何がっていうか…全体的に」

「そ、そ、そうかあ〜？」

「うん。急にデカイ声で独り言いうし、うわの空…って感じ」

「!？」

「退院してから変よ…。一回、病院行きなさいよ」

「う、うん」

『友人に精神科、勧められてるなんて…』

「誰が精神科すすめられてんのよ!？」

私は今までにないくらい、大声をだした。

それには、友人も驚きと他に…遠い人のような眼差しで見られた。

「うん。精神科…行ったほうがいいよ。紹介しようか？」

休日

陽がテンテンとさしている休日のお昼。

サエの家では、いつもの2人が他愛もない話をしていた。

「はあゝ」

『何、ため息吐いてんの?』

少し、不信そうな声で言う。

「うゝん?」

私はベッドで雑誌をペラペラめくり、適当に返事をした。

『サエ…ため息っていうのは、悩み事やら不安やらその他……な
どがある人が吐くものよ?』

「何が言いたいのか?」

『アンタに、悩みなんてあるのか、ってこと』

私は、その一言に、不意をつかれた気がした。

「あ、あるわよ!!失礼ねっ!!」

『へえゝ何?』

「せ、岸野先輩とか…?」

『えっ…誰だっけ、それ?』

「…サヨってさあ、3日で人の話忘れる人でしょ？」

学校に一人や二人は、そういう素晴らしい能力を持つてる人がいる。

『そんなわけないじゃん』

「本当？意地、張らなくていいんだよ？」

『張ってないわよ』

「はい、はい。わかりましたあゝゝ」

『はあゝ』

サヨは深くため息を吐き、ちらりとサエを見て、もう一度、呆れ顔でため息を吐いた。

『…………ふう』

「さて、気晴らしに散歩でもしようか」

『……ええ〜！？私もかい？嫌だよおっ』

「別に、来なくても良いけど……何かサヨの散歩ってどこのこと？」

『…………精神科？』

「な、まだそれ引きずってんの！？」

『だって、ね〜？』

「いや、ね〜？って聞かれても……元はアンタが原因だし？」

『そうなんだ〜私の声、アンタにしか聞こえないんだね？ひとつの豆知識わ』

「今は、もう、使えない豆知識ね……」

9：雪

冬も終わりへと近づいてきたというのに、
空は灰色に染まっていた。

雲が覆いかぶさっているせいなのか…。

まるで、これから何を何か、悟っているかのように。。。

そして、その時は…確実にゆっくりではあるが、近づいていた。

「うわぁ〜。また、雪が降っているよ!!」

友人が窓へと駆け寄り、ガラガラと開けた。

「うつつ、寒っ〜!!」

「見て、見て!! キレイだよぉ」

友人は、私をそっちのけで、窓の外へと腕を伸ばした。

「ん? そーだけど…寒いわ」

「でも、私、もっと近くで見たいの」

「え？」

「ね、外へ行こう！！」

友人は私の手を握り、外へと飛びでていく。

『…良いじゃない。雪、キレイだし』

サヨは、他人事のようにヘラと笑っている。

確かに、キレイだけど…。寒いのに越したことはなかった。

「ほらっ！！やっぱり」

外へと一歩でれば、辺りは真っ白。

空を見上げれば、雪が止む気配もなく、降り続けている。

「ほんと…きれえ」

白い吐息が妙に、切なさを増させていく。

そっと、手を前へと差し出す。

雪はヒラヒラと舞っていく。

私の手へゆつくりと降りてきた。

スーと、手の平の温もりで雪が溶けていく。

「あっ……」

「呆気ないものね」

サエは、手の平で溶けた、雪だったものを見つめ、ふ、と笑みを零した。

『そうかしら?』『えっ?』

10：人

『果たして、本当に呆気ないものだったのかしら…。私は…。そうは感じなかったわ』

『年に一度しか降らない。空中に舞っている時に、輝いていて…。落ちると共に姿を決してしまふ…。私にとっては、呆気ないよりも…。穿かなく感じるわ』

急に、哀しいことをいうサヨの言葉を耳にし、また空を見上げた。

「サヨのいう通りかもね。…私もわかるわ、サヨの気持ちが…。な
んでかな…」

『同じ、人間だったからじゃないかしら？』

サヨは少し、声のトーンを落としていった。

「人間…だっ…た…？」

『そう。私は、自分がどういう人間だったか、どうなったか、全部…記憶にあるわ』

「それは…哀しいこと？」

『そうね。その人、次第だわ。私は…哀しい…過去があるから忘れてしまいたかった』

「そう…なんだ。でも、私は記憶が…残ってほしい。記憶が失くなるって、哀しいことだと思うわ。それに、きつと、私はその時、後悔すると思うから…」

『……………』

「サエ？また、独り言？」

「え、あ、うん」

「もう、中に入るう？」

友人は、校舎へと向かっている。

「私…もうちょっと、ここにいたいわ。先に入ってきてくれない？」
軽く笑い、また空を見上げる。

「うん、別に良いけど」

そういうと、学校の中へと姿を消した。

——ボフ。

真っ白な雪の中へ、体を倒した。

「サヨ…？」

『ん？』

「うっん、なんでもなあ〜いつ!!」

私は雪に包まれながら、くすくすと笑った。

サヨ…本当はね。

私達、友達だよね？って、聞こうと思ってたんだけど…いいや。
今、楽しくて、幸せだから。

夢

「もう…冬も終わりね」

この切り出し方は、何故だか、笑ってしまいそうになった。だって、なんだか良くドラマに使われてる

「私達、もう終わりね」
って言ってるシーンと似ていたからだ。

まあ、それは置いて。

つい、この間まで真っ白だった道は、雪溶け季節だった。

『次は春ね。雪の次は、花が一面に…』

「あ、そういえば!!」

『なによ? 大声だして』

「もうすぐで、私達が出会って、一年…経つ頃よ?」

そう。

私達が出会ったのは、春休みが明けた頃。
交通事故になった私、サエと、私の中のもう一つの声の犯人、サヨ
が出会った。

もう、あれから一年か…。長かったようで、短かったような。
ま、そんなものなだけ。

サヨと出会って、可笑しい思い出しかないや。

「サヨ…」

「サヨって…誰？」

後ろから、男の人の声がした。

振り替えると、クラス男子が立って、こちらをじっと、見ていた。

「あ…こんにちは」

「うん、こんにちは。で、サヨって誰？」

この男子は、影が薄いというか、目立たない感じの人で、だからと言って、存在が薄いというわけでもないそんな子だ。

そして、はぐらかそうと話を流そうとしたが、ナチュラルに流れを逆流させてしまった。

しかたない。

「うん。実は…サヨっていうのは去年まで飼っていた金魚なの…」
という風に切り出した。

「へえ、その金魚が死んじゃったの？」

少し、躊躇いながらも質問は止めなかった。

私はその質問には、首を横に振り、下を向いて、そっと口に出した。

「…おばあちゃんところに預けてあるの」

幻

私は心の中で、叫んだ。

ごめんね。

ごめんなさい、おばあちゃん!!と。。。

サヨは金魚なんかじゃない。

私は嘘をついた。

確かに、金魚は生きてる。それに、おばあちゃん家に預けている。

が、本当のサヨの正体を誰にも隠してる。
これだけは、誰にも言えなかった…。

『本当？岸野先輩にも？』

「あたりまえじゃない」

「やっぱり、サヨって金魚以外でも他にいるんだね」

「え、何のこ……」

「もう、嘘は止めよう。わかっているんだ」

「どういうこと!？」

「サヨが人間じゃないって…こと……」

私とサヨが少しずつ、遠ざかってゆく。

「…夢か」

目を開くと、私は机の上で腕を伸ばしながら眠っていたのだ、という痕跡がある。

夢か…よかった。
本当に。。。

私は、あの後、どうなったか知ってる。
私の夢だから。

『なんか、うなされてたわよ』

「うそ!?!」

『うん。夢の中で私の名前、読んでいた』

「うん…夢の中でサヨの名前、出てたから」

『どんな…夢?』

「言いたくない」

『そう、言いたくないなら…しょうがない』

「…ごめん」

『何で謝るの?言いたくない時だって、誰にもあるわ』

サヨが大人に感じた。

私と同年代くらいだ、と言っていたが、私からしてみればサヨは、もう、大人だった。

そんなサヨに間を置いて。

「ありがとう」

これで、ちょっとはサヨみたいに、大人に近づいたかな…。

13・桜

今年も…桜は満開だった。

ひらひら、と舞ってくる桜は可憐だった。
雪のようだ。

「サヨ、知ってた？」

『何が？』

「あのね、舞ってる桜を両手でつかまえて、お願い事をすると叶う
って!!」

『ジンクスでしょ？で、何をお願いするの？』

「えつと〜先輩と…」

『また、先輩？アンタ、先輩のことしか頭にないの？』

「いいのっ」

『止めときなよ。きっと、苦しいだけだよ』

わかってた。

手が届かない人だつて。

桜が掴めた時点で、私が一歩踏み出さなくちゃ意味がないのも。

『サエ…あのね』

「あ、先輩よ！！すごい、偶然！！」

サエは足を止め、先輩の方を凝視した。

「…女の人と歩いてる」

「……彼……女……？」

もう、一度。

先輩の方を見える。

確かに、女の人と歩いてる。

手を繋いでる。

そして…抱き合っていた。

「あは、やっぱり、彼女いたんだ…でも、お似合いだな」

嫌だ、いやだ、イヤだ！！お似合いだから見たくない。

私が惨めになる！！

「ふふ、彼女、可愛かったなあ」

足がゆっくりとであるが、後退り出来た。

「……っ」

サエは走った。

途中、何人もの生徒の肩に打つかった。

桜の並木道も、終わりに近づいていた頃になり、ゆっくりと歩くのを止めた。

「はあはあ、はあ」
息を洩らし、呼吸を整えた。

『サエっ、危ないっ！！』

私の耳に入ったのは、サヨのその声と、甲高いブレーキ音、それに…鈍い音。

——ドン。

14・廻る

「……………桜」

桜が私の目の前で、舞っていた。

廻る。

廻る。

サクラガマワル。

私は道端に倒れていた。

「大丈夫かい、お譲ちゃん!!」

「わ、たし…?」

「あんた、さつき車にひかれかけたんだよ」

ひかれかけた?

確か、私はひかれたはずじゃ…。

『サエ』

「サヨっ!!!!サヨ、どこ!?!」

私は思い出した。
事故の直前を…。

サヨの声が耳に入り、私が気付けば、車はもう、目の前に……。私の目の前には、髪の高い、金髪の少女がいた。瞳は髪と同じ、澄んだ色をしていて、肌は白くて、どこからどうみても美人だった。

そして、それは…サヨだった。

その子、サヨは私を突き飛ばした。

その後、物凄いブレーキ音と悲鳴、鈍い音がした。

勿論、サヨが見えるのは私だけ。

「サヨ!」

私は知らないおばさんの腕から抜け出し、サヨの倒れてる元へと駆け寄った。

「サヨ、サヨ? 聞こえる? 返事して…」

『うるさい、阿呆』

「サヨー!」

『サエ…怪我はない?どこも…痛くない?』

「あたり…まあだよ、サヨが助けでくれたも…んっ」

サヨの頭を膝にのしたまま、私は泣きじゃくった。

『そう…』

『…無事で、よかった』

サヨが周りには、きらきらした光が飛んでいた。

この、膝の上にいるサヨは本物?

それとも、私の幻?

幻のわけない…だって、そこからサヨの声が聞こえるんだもの。

過去

『サエ…私が、自分の過去を知ってる、と言ったの覚えてる？』

「う、うん」

『私はね…何百年前かは忘れたけど、と、ある町の村人だったの。そこは、とても平和で…豊かではなかったけど、人々が温かい心の持ち主だったの。そして、それから、何年も平和だったの』

「平和…だったって…」

私が、そう言うときクリと頷き、また口を開いた。

『そう…。何時の日か、作物は枯れ、病が流行りだした…。そして、何処からか得体の知らない噂までもが、流れてきたの。…この町がこうなったのは、魔女達のせいだ、って』

「ま、魔女!？」

『驚くのも無理ないわ。今の世の中に、魔女を信じてる人なんて、そうそう、いないもの』

『その噂と共に、“魔女狩り”が行なわれた。でも、それは名だけ…作物や病と魔女は無関係なの。だから、魔女なんているわけがなかったのに…少しでも、怪しい行動をすれば、直ぐ様、魔女と決

め付けられた。そして…私も、その一人』

うそ。。。

サヨに魔女の疑い？

何かの間違いよ。

『魔女狩りで捕まった子は、次々と火あぶりにされていった。私は、それを毎日腐る程、見てきて…気が付いたら、恐怖のあまり、逃げたの。だけど、結局、殺されて……』

「そんなつ、ひどい…。でも、なんで、今、サヨは私の中にいるの？」

『私と…サエがどこか共通してたから…かもね』

「…共通——？」

『この世界は、いつも一つなのよ。きっと』

運命（前書き）

あーとー少して最終話！ー笑もういつきに更新しちゃいます

運命

———この世界は
いつも、ひとつ———。

『私は過去の人間、サエは現在の人間……。でも、私には聞こえたの……声が。だから、きつと、生きている場所と時が異なっても……この世界は、ひとつなんだ、と思う』

「だから、サヨは今、私の中にいるの？私の中にいたからサヨは死んじゃうの？」

『ううん、これが、私の運命だったの。死んで、声が聞こえて、サエの中にいて、今、こういう状況がある』

「でも、運命というものは、その人次第で変えられるのよ……！」

『ふふ、そうね。私は運命に立ち向かう勇気がなかったわ……。それからもう、いつのまにか運命をドコかで、変えてしまったか……』

『どちらにしろ、私、今、後悔という文字はないよ』

「ど、して……そんな……」どというのぉ……」

『だって、私……サエに逢ってから、いろいろあったけど……本当に楽しかったから……幸せ、だったから』

「サぁ……ヨぉ……っ」

『ごめんね、サエ。いろいろ、迷惑かけちゃって…』
サヨの周りは、金色に輝いていた。
今にも、消えてしまうほど美しく。

「サヨ、どこにも…行かないでよあ…」

私はひたすら泣いた。

私には、泣くことしか、出来なかった。

『こんなことで涙なんか流すんじゃないわよっ…泣くのを止めなさい、サエ』

そう言う、サヨも目尻に涙を浮かべていた。

「サヨお…もっと、一緒にいたいよっ…!」

『私は、何時でも、一緒にいるわ。アンタの中で、ね』

サヨは、サエの胸を指さして、言った。

「ねえ、サヨ…私達…友達だよねえ…」

『馬鹿ね、そんな容易いものじゃないでしょう？サエ、アンタは私の最初で最後の相棒よ』

「サ…ヨ」

17・別れ

「サヨっ、ありがとお…私の、私の中にきてくれて…一生、忘れな
い」

『もう…お別れみたいね。早いわ……どうして、別れって、こんな
に早く感じるのかしら—…』

腕を精一杯、空に伸ばした。

『ああ…本当に幸せ。これから、空からみてるから…サエのこと…』

「私の声、きつと…届くよね。サヨに…サヨに…届くよね？」

『届くよ…きつと』

『ああ…願わくば、この広大な空に…なりたい…。サヨを空からあ、
見守りたいっ…』

「ありがとう…サヨ…」

『私のほづこそ、ありがとう…』

そう言った瞬間、サヨの体は発光し、消えつつあった。

きつと、これが…最後の言葉になるでしょう。

きつと、これで逢うのも最後となるでしょう。

「私の相棒…サヨ。これから、ずっと、一緒だよ」
『うんっ…』

サヨの体はスーと、色が薄くなっていった。

そして、ふわっ、という風と共に、サヨの姿は消えてしまった。

空へと向かい。

風の揺りかごにのり。

さようなら。

私の最初で最後の相棒…サヨ。

親友よりも…

…強い、絆。

サヨが居た場所には、桜が舞って、積もっていた。
はたかも、そこに、まだ、サヨがいるかのように。

そして、またふわっ、という風と共に、広大な空へと桜が舞う。

それは、桜の交響曲のようだった。

空を見上げれば、サヨが笑って、見守ってるかのような、青空が続いていた。

そして、宙には、桜がひらひらと舞っている。

それは、あの冬の雪のようにキレイで可憐なものだった…。

18・相棒（前書き）

やっと最終話です！！

評価や感想まっています！！

18・相棒

D e a r : サヨへ

気が付けば、季節はふ、とかわり続いています。

サヨ…元気にしてますか？

広大な空はどうですか？

私をちゃんと、見つけて、見守れますか？

ときどきは、サヨの声が聞きたいです。

今でも、物足りなさを感じます。

来年の春。

また、サヨと桜が見れると良いです。

私の『声』は届いてますか。

サヨに、あなたに聞こえてますか。

いつか、また出会えることを信じて…

たった一人の相棒

——サヨへ。

サエより

その手紙を折りたたみ、紙飛行機にする。

すー、と手から滑らせ まだ知らぬ、遠い空へと飛ばした。

君に届くだろうか。

君は気付いてくれるだろうか。

君は…返事をしてくれるだろうか。

私に。。。。。

窓を開けたまま、夕暮れ時の空を眺める。

紙飛行機…どこまで、飛んでいっただろう。

教室が薄暗い、夕日の明かりだけとなった。

ぶわっ、と強風が、窓から教室に入ってきた。

壁に張り付けられていたプリントが一齐に、バタバタと音たてる。

『サエ…ありがとう』

微かに聞こえた声。

君には届いていたんだね。私の声が、、。

君は、その広大な空で、私を見つけてくれたんだね。

君は、私に、返事をしてくれたんだね。

「ありがとう…サヨ…」

無数の涙が頬を濡って、零れ落ちていった。

ああ、一生忘れることのない。
君と私の物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0125b/>

アンタ = 相棒Yo

2010年10月9日01時25分発行